【勤務参考】　　１５．１０．１

上田元将補講話紹介（その３）

上田元将補（元第１術科学校長）の講話集から数点をシリーズで紹介する。

文化の野蛮性　　15.7.19

人類の英知は、この悲しき宿命を乗り越えられるか―――

「文化」と「野蛮」は、反義語の関係にある言葉である。では、どうして「文化の野蛮性」という一見矛盾するタイトルが生まれたのか、現実として、何故人類社会にこうした矛盾が続いているのか、人類は、こうした宿命的になっている現実を乗り越えられるのだろうか。

平成１５年７月１３日（日）日経新聞２３ページ、「文化の野蛮性力説」というタイトルのコラムが、ふと目に付いた。

二十世紀後半の思想に大きな影響力を及ぼしたフランクフルト学派の中心人物であったドイツの哲学者、テオドーア・アドルノ（１９０３～６９）の生誕百年に際して彼の言葉「アウシュビッツ以後、詩を書くことは野蛮だ。」を紹介し、「米同時テロ後、顕著になった「優れた文明による悪や野蛮の成敗」という図式の前でこそ、アドルノの言った「文化の野蛮性」は、その説得力を増している。」と、日経新聞社　文化部　田村広済氏が述べていた。

私は、文化には有形無形の形のものがあるが、それは、ある環境の下、人類の長い期間の共同生活を通じ、あるものが習慣となり、伝統化していく中、これは共同生活上大事だ、これはそうではない等と識別され繰り返されていく過程において、道徳や掟の形として発展し共通の価値観が発生する、それが、例えば、宗教として、哲学として、法として、道義として、文学として、音楽として、絵画として、建築様式として、俗に言う文化となったと捉えている。よって、ある文化は、底流する共通の価値観の上に成り立っているのであるが、風土やその地方の人々の経験した歴史などにより、文化は、ある独自性を持っていると考えている。　人が、同じ親、同じ教育のもとに成長したとしても、異なった体験という後天的環境の違いは、性格を変え、知識を変え、総合的に見識を変え、本人の行動様式を変えていく、つまり、人の持つ価値観、文化を少々異なるものにしてしまうようなものである。

こうした相違する文化の衝突が、優しい言葉を使用するとしたら文化の違いが、例えその文化が高度に発展していたとしても「野蛮な行為」を生んでしまう。アドルノは、アウシュビッツの悲惨さに目を剥き、「文化の野蛮性」を説いたのではないかと考える。

戦いと血の歴史と言われる欧州方面においては、衝突の結果が、負けた部族、民族の壊滅に近い現象となる歴史を経験し、これが故に衝突の熾烈度が増幅されつつ繰り返されていく。こうして人々が悲惨さに馴れ、鈍感となりつつも、目を覆うような新たな現象の惨さに胸を痛める、こうした流れの中でアドルノの言葉が出た、若し彼が他の文化人であっ

たとしたら、アウシュビッツの衝撃をどのように受け止め、どのような表現になっただろうかと思いたくなる。

話は少し横道に外れるが、西郷南洲遺訓（岩波文庫）の中に欧州文化の野蛮さを指摘する記述がある。勿論、欧州文化圏に生活する欧州人自身は、その自分自身の文化に野蛮さがあるとは認識していないのであるが、現代に比較すると極端に情報交換の少ない時代であった１９世紀において西郷隆盛（1827 ～ 77）が欧州文化による行動様式は野蛮であると認識していたことが思い出される。

欧米列強のアジア進出を国難と認識した幕末偉人の働きにより、その侵略に抗し、国体を維持した日本は、欧米文明に学び、速やかに近代化を図り、力を蓄えると言う「富国強兵」策を推進した。この一環として、国内の動乱が続き未だ体制の整備が完成しない中にも拘らず、日本の国の形と進路を模索するため、２年弱に亘る岩倉使節団の訪米派遣を実行する。

この結果、欧米の近代化、その力と国際政治の激しい現実を強く認識した帰国派を主流とする政府は、当時西郷により主唱され、既に今で言う閣議において決定されていた征韓論を排し、国力の充実を図る施策を優先するとした。西郷とは同郷の志士 大久保利通が、西郷と袂を分かつ覚悟で、「凡そ国家を経略し、その彊土人民を保守するには、深慮遠謀なくんばあるべからず。故に進取退守は、必ずその機を見て動き、その不可を見て止む。恥ありと言えども忍び、義ありと言えども取らず。これその軽重を量り時勢を鑑み、大期する所以なり。」と、征韓論は理解できるが現在日本の採るべき道ではないと述べ、更に、実情を無視して目標に直進するは空論、されど、状況に埋没して目標の展望を欠くのも因循姑息、目標を堅持しつつ現実に即して時勢を得て事を為すべきと敷衍したという。旧友西郷への思いを棚に上げ、苦渋の選択を行った大久保個人の心痛が感じられる。

こうした情勢ゆえに、西郷は、結局征韓論に敗れ鹿児島に下野する。西郷を敬愛する私学校生徒の不穏な動きに危惧した政府は、ジュネーブ渡欧中の同郷の大山　巌を帰国させ、この説得に当たらしめた。

このとき、大山は、そうした動きを封じるには西郷を連れ出すのが良策と考え、「兄さん、一緒にヨーロッパに行こう。」と西郷を誘ったが、西郷は、大山の誘いをいとも簡単に断った。その行が遺訓１１として次のように記述されている。

「文明とは道の普く行はるるを賛稱せる言にして、宮室の壯嚴、衣服の美麗、外観の浮華を言うには非ず。世人の唱ふる所、何が文明やら、何が野蛮やら些とも分からぬぞ。予嘗て或人と議論せしこと有り、西洋は野蛮ぢやと云いしかば、否な文明ぞと争ふ。否な野蛮ぢやと畳みかけしに、何とて夫れ程に申すにやと推せしゆゑ、実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙昧の国に対する程むごく残忍の事を致し己れを利するは野蛮ぢやと申せしかば、其人口を莟めて言無かりきとて笑はれける。」

西郷が、「本当の文明なら、未開の国に対しては慈愛を基本として開明に導くべきなのに、未開の国に対する程残忍なことをし自己利益を図っている。これは、野蛮だよ。」と言っているのだが、欧米の歴史、特に先を争って世界に展開したこの５世紀程度を遡って見ると、正に当を得ていると思える。若し西郷が、９．１１米同時テロを聞いたとしたら、多分「そうか、惨いことをしてきた報いじゃ、（罰（ばつ）ではなく）「ばち」を被った

こと然りじゃ。」と言い放ったに違いない。
　この遺訓から大山自身も西郷と同じ見解を持っており、「全く兄さんには、返す言葉が無いよ。」と頬を膨らませ苦笑しつつ、二人が談笑している姿が浮かんでくるではないか。
　この時以来、約１３０年、後発の我国を含め先進の文明国による国際的蛮行が実行された。現実として世界の秩序を姑息ではあるが当面維持するためには止むを得ない処置とは言え、未だこうした蛮行が恰も世界の主流であるかの如く続いていることは嘆かわしい限りである。
　冷戦後、「グローバリゼーション」という言葉が、世界の善の潮流のように流行りだしたが、これは単なる世界に分布する一つの文化、価値観の広がりを意味するものであり、むしろ同時にアドルノの言う「文化の野蛮性」の広がりをも示していると認識しておく必要がある。
　人類は、抗争の熾烈化とこれに伴う無用の殺人劇に胸を痛め、各種の国際的取り決めを作り、またこれらを管理する国際連合のような協同組織を作るなど、英知を集め、その克服に努力はしているものの、現実としては、未だ「他国より自国、協調よりは独自で」という各民族、各国家の主張や姿勢は変ることなく、有史以来「文化の蛮行」という同じ過ちを、数千年以上に亘り繰り返している。残念ではあるが、こうした傾向は、楽観論者と自負する私自身でも、今後少なくとも数百年を・・・それも、人類の英知によってではなく、地球の環境維持能力が限界だと明瞭に見えるようになり、そして、それが采配者となり人類を裁くまで・・・要すると考えている。
　話を、西郷の時代に返す。西郷は、何故情報交換の無い時代に、そうした見識をもっていたのか、流石は明治の偉人だと言ってしまえばそれまでだが、私は、当時の偉人が的確な見識を持つに至ったのは、簡単に言えば、「しっかりと、国学、漢学を修めていた。」、つまり、「一つの軸を持っていた。」と思うのである。私たちの世代が受けてきた勉学は、知識先行となり、より広くとなり、従って、より薄くとなったような気がする。「歴史」ひとつにしても、歴史は人によって作られるという事実を認識すれば、当然ある人物が、どのような背景の中、何を求めて何をしたかが教えられるべきであるが、そうではなかった。
　最近「日本人には顔が無い。」・・・・とよく言われる。当然である。日本人が日本を知らないからである。よって、耳に入る知識が、日本のものか、ある国のものか判別がつかない。従って、日本を語れないのである。このことは、ひいては外国について、観る目が薄く、外国についても観察できず、語れない・・・という結果を生み出している。
　西郷は、日本を深く知り、それ故に外国との差を明確に認識した。そのように考えれば、西郷が、江戸城の無血開城に同意したり、「文化の野蛮性」に言及したり、征韓論を唱えたりしたのも、よく理解できるところである。（次号に続く）